

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	前置詞付き遡及不定詞と前置詞の脱落
Author(s)	石川, 清文
Citation	ニダバ , 2 : 93 - 94
Issue Date	1973-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044696
Right	
Relation	



前置詞付き動詞及不定詞と前置詞の脱落

石川 清文

- 1 (1) a、 He used a table to write a letter { on. }
 b、 { φ }
- (2) a、 There is no table to write a letter { on. }
 b、 { *φ }
- 2 (3) a、 I have no place to go { to. }
 b、 { φ }
- (4) a、 I have no park to go { to. }
 b、 { *φ }
- 3 (5) a、 I haven't got any money to buy the book { with. }
 b、 { φ }
- (6) a、 He has a new pen to write { with. }
 b、 { ? φ }

上記(a)文中の不定詞は Jespersen の言う retroactive infinitive のうち、前置詞が潜在的目的語を持つものである。(a)から問題の前置詞を落した(b)は文法文のままであるものと非文になってしまう場合がある。(a)を「P型」、(b)を「φ型」と呼ぶことにすると、本発表の目的は「P型」に対応する「φ型」が文法文として存在するのは、どういう条件のときかを明らかにすることである。

§ 1 (1 b) が文法的であるのに対して (2 b) が非文となるのは、(1 a)(1 b) がそれぞれ、

1 (a)' He used a table [he Aux write a letter on the table]s

(b)' He used a table [he Aux write a letter]s [△] purpose

から派生されるのに対して、(2)では、

2 (a)' He used a table [he Aux lean the ladder against the table]s [△] purpose
 のみが可能であることによる。つまり、

2 (b)' He used a table [he Aux lean the ladder]s [△] purpose

の如き深層構造がありえないからである。(はめこみ文が非文を生みだす。)

§ 2 (3b)が文法文であり、(4b)が非文であるのは、明らかに不定詞に修飾される名詞の種類による。そういう種類の名詞であれば「 ϕ 型」が可能か、また、それは何故か、を明らかにしたい。

§ 3 Instrumental 'with' は ambiguity を引きおこさない限り、deletion が可能である。たとえば、§ 2 で論ずる予定の、

(7) Autumn is the best season to study(in).

においては、ambiguous になるにもかかわらず「 ϕ 型」が普通であるのに、

(8) * I've got no money to buy.

は(「金を買う」の意でない限り)非文となるのである。このことは§ 2における「 ϕ 型」と§ 3における「 ϕ 型」は異なった原理によって、可能となることを示している。

(47年8月)

《付記》 口頭発表においては、時間の制限のため取り上げられなかった現象を含めて、より詳しい(同題の)ペーパーを、『島根大学文理学部紀要・文学科編 6号』に発表した。

(48年2月)